

メタ記憶における内的表象抑制の影響

The effect of Representation Inhibition in Metamemory

高城 雅裕 (Masahiro Takagi) 指導：杉森 絵里子

目 的

日常場面において、展望的記憶を正確に遂行するためには、行為の意図に対する正確なアウトプットモニタリング（自身が行為を実行したか否かを判断する過程）が求められる。

本研究では、完了済みの意図は抑制されるのか活性状態を維持するのかを検討するとともに、抑制の有無がその後の行為のアウトプットモニタリングにどのように関連するのかを検討することを目的とした。

方 法

【実験参加者】 大学生78名（男性36名、女性42名）

【実験デザイン】 中断方法（中断・完了）、テストタイミング（当日・1週間後）、学習方法（メモあり・メモなし）の三要因混合計画であった。

【材料】 カタカナ4文字の名詞20語を使用した。

【手続き】 実験は学習、再生、モニタリングの3段階からなった。学習段階では、コンピュータのディスプレイ上にランダムに配置された20単語を5分間呈示した。

再生段階では、実験参加者は、二重課題を遂行しながら学習した単語を再生した。実験参加者が単語の再生を開始し10～12語再生したタイミングで、課題を終了させた。その際の教示は、中断条件の場合、“また後ほど思い出してもらおうが、ひとまず終了になります。”であり、一方、完了条件は、“この課題は終了になります。”であった。その後、時間を空けてモニタリング段階に移った。

モニタリング段階では、実験参加者に、学習した単語を思い出せるだけ書き出させた。その後、その単語を再生段階時に、“書いた”、“書いていない”、“書いたかどうかわからない”の3つに分類させた。モニタリング段階は、1週間後にも実施し、1週間後の時点で思い出せる単語を再生させた後、その単語についてのアウトプットモニタリングを求めた。

結 果

反復エラー数に関し、三要因分散分析を行った結果、中断方法の主効果が有意であり、完了条件の方が中断条件よりもエラー数が多かった [$F(1, 70) = 4.93, p = .03$] (図1)。

脱落エラー数に関し、三要因分散分析を行った結果、2次の交互作用が有意であった [$F(1, 70) = 13.37, p = .00$]。

要因ごとに単純交互作用、単純・単純主効果の検定を行なった結果、図2のようになった。

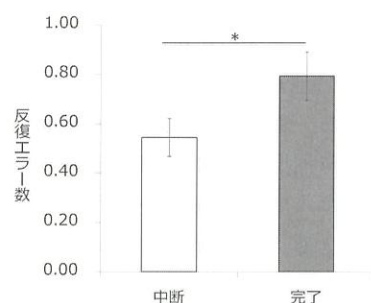


図1 中断方法別の反復エラー数 (* $p < .05$)

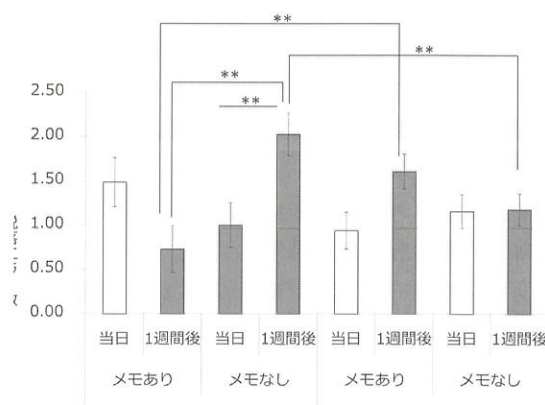


図2 要因別の脱落エラー数 (** $p < .01$)

考 察

反復エラーに関し、完了条件の方がエラー数が多いことから、完了済みの意図に対し抑制が機能したことが示唆された (Scullin et al., 2009)。その結果、再生したのに再生していないと誤判断した（反復エラー）と考えられる。

脱落エラーに関し、「中断」「メモなし」「1週間後テスト」で最もエラー数が多かった。「中断」「メモなし」により、記憶痕跡が強化され、「1週間後テスト」で、メタ記憶知識に頼った判断をし、エラーを犯したと考えられる。従って、「記憶痕跡が強い」というメタ記憶が脱落エラー生起の要因になることが示唆された (杉森ら, 2005)。

研究で得られた結果は、完了済みの意図の非活性化理論を支持する (Scullin et al., 2011)。完了済みの意図が抑制されることで、行為のアウトプットモニタリングに影響を与えることが示唆された。